大学教授法の実際

W. J. マッキーチ／高橋靖直訳

TEACHING TIPS

A Guidebook for the Beginning College Teacher

著者略歴

W・J・マッキーチ (Wilbert J. McKeachie)

ミシガン大学、学習・教育・研究センター所長。同大学、前心理学科学科長。これまでアメリカ心理学協会会長、およびアメリカ大学教授協会、教育研究・出版委員会委員長を務めた。現在，アメリカ高等教育協会会長。

訳者略歴

高橋靖直 (Takahashi Yasutada)

1942年，岩手県に生まれる。1971年，東北大学大学院教育学研究科修了。ユネスコ・アジア文化センター勤務。1979年，オハイオ州立マイアミ大学大学院博士課程修了。教育学博士。現在，玉川大学文学部教育学科助教授。

著書：『現代の教育原理』（共著，学芸図書）

訳書：J. L. ヘンダーソン『人類生存のための教育』（共訳，玉川大学出版部）

大学教授法の実際

1984年3月1日　第1刷

著　者　W.J. マッキーチ
訳　者　高　橋　靖　直
発行者　小　原　哲　郎
発行所　玉川大学出版部
〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1
電話 0427-28-3209（編集）0427-28-3213（営業）
振替　東京 8-26665

印刷・製本　(株)大文堂印刷

NDC377　　(分) 3037 (製) 08861 (出) 4355

大学教授法の実際

W. J. マッキーチ／高橋靖直訳

Teaching Tips

edited by Wilbert J. McKeachie

Translated by Yasutada Takahashi

Copyright © 1978 by D. C. Heath and Company

Japanese translation rights arranged with D. C. Heath and Company
through Japan UNI Agency Inc.

Published 1984 in Japan by Tamagawa University Press

訳者序

本書は、アメリカ合衆国ミシガン大学で長年教職にあり、大学教授法の研究に多大の業績を残してきた著者が、若い大学教師のために書いた教授法ガイドブック「教授のコツ」(*Teaching Tips*)の日本語訳である。一九五一年に初版が出て以来、アメリカ国内はもとより海外でも広く読まれ、七回もの改訂を記録して定評のあるこのガイドブックを、日本の大学教育に関心を持つ読者にお届けできることを嬉しく思う。

ほぼ一年前、玉川大学出版部から『大学教授法入門』(ロンドン大学教育研究所著、喜多村和之、馬越徹、東曜子編訳)が出版されたが、本書はその姉妹編と考えてよい。

訳者がそもそもアメリカの大学における教授法に関心を抱くようになったのは、一九六八年にオハイオ州、ケント州立大学に留学したことに端を発する。多様な教授法に接した際の驚きは今でも脳裏に鮮明に焼付いて離れない。それから七年後再びオハイオ州マイアミ大学大学院で三カ年研究の機会が与えられ、学生として、また学科長の助手として学び働くなかで、大学が教育方法にどんなに関心を払っているかを十分知らされたのであった。その後アメリカの他の大学に留

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

学した人々の体験談や報告から、私の経験が特定の大学に限った特殊なものではないとの確信を持つとともに、わが国の大学教育のあり方を考えるようになったのである。

アメリカの大学における教育方法に対する関心の高さと改善の努力の背後にある様々な要因を分析することは容易なことではないが、一つはっきりしていることは、そのような関心が急速に高まり努力が払われるようになったのは一九五〇年代に入ってからであって、比較的新しい現象であるという点である。それはアメリカの高等教育の大衆化の時期と一致する。

アメリカの高等教育は第二次世界大戦前後から一九七〇年代にかけて急激に大衆化の道を歩み、一九七五年には高等教育への就学率が五〇パーセントを超えるに到った。この学生層の急激な変化が大学の教授法への関心を高め、改善を推し進めたことは疑いない。

一方わが国の場合、一九五〇年代から七〇年代の経済成長に呼応するように高等教育は「エリート型」から「マス型」に移行した。大学・短大への進学者の同年齢人口比率は、一九七六年度には三九・六パーセントに達した。その後一九八三年度には三五・一パーセントまで低下したが、専修学校など他の中等後教育機関に学ぶ学生を加えれば、一八歳人口の半数に近い数が中等教育以上の教育を受けていることになる。

この高等教育の「マス型」への移行は、必然的にその教育の社会的価値の相対的低下をもたらす一方で、学生層の変化に対応したカリキュラムと教育方法の改革・改善を要求してきている。

ところが教育方法に関してみれば、日本の多くの大学は何ら組織的対応をせず、あるいはでき

ずに、もっぱら教師の個人的努力に期待する形をとってきたように思われる。そして、その教師の多くは自らが受けた「エリート型」であった時代の大学教育の典型的教授法、例えば講義法を、その授業科目の目標や学生の特性とは無関係に踏襲してきているのではないだろうか。

今、日本の大学において教授法が問題になる第一の理由はこの学生の大衆化、多様化に起因すると考えられるが、もう一つ見過ごすことができない要因として、大学教育の目的・目標の変化を指摘できよう。すなわち、これまでの知識伝達一辺倒から、近年特に、思考力、批判力、分析・統合力、創造力、情報処理能力の育成といった目標が重視されるようになってきた。このような目標を達成するためには、講義法に固執することなく、多様な教授法が活用される必要がある。さらに、今後一層強まるであろう国際化や生涯教育構想への対応という点からもこれまでの大学教育組織と方法の再検討が求められている。

教授法改善の動きは、このような状況の変化にもかかわらず極めて鈍かったが、最近になってわずかながら改善の兆が見えて、教授法に対する関心が高まりつつあることは喜ばしいことである。今後この分野の研究が推進され、教授法改善の一歩を多くの大学が、教師が踏み出すことを期待したい。本書がそのような試みのための一つの参考書として活用されることを願うものである。

日米の大学間にはその歴史、制度、組織のどれをとっても大きな違いがあり、その上教授法には教育・学習活動に付帯する様々な文化的要素が反映するので、本書の教授法やそのコツがその

まま日本の大学で使えるとは思わないが、それらの方法が依って立つ理論や原理から学ぶことは多いと確信する。

翻訳については、出版の諸条件と翻訳出版の目的等を考慮して、逐語訳を排し、また、原著の約四分の一を割愛したが、章構成および基本的内容構成はそのままである。

本書の翻訳出版に際しては、玉川大学文学部教育・芸術担当部長岡田陽教授、皇晃之東北大学名誉教授、および関野利之玉川大学出版部長代理のご指導をいただいた。厚くお礼申し上げる次第である。また編集課の宮原正弘氏と成田隆昌氏には大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

最後に、ケント州立大学、マイアミ大学の留学経験なくしては、原著の翻訳は極めて困難なものになったであろうことを覚え、その意味で、一人の貧しい日本人留学生を支えてくれたアメリカの多くの人々の善意と友情に対し、心から感謝の意を表したい。

本書が日本の高等教育の向上発展とアメリカ教育の理解の一助になればと念じつつ。

一九八四年早春

高橋　靖直

改訂版への序文

本書は新任大学教師がその任務に就き、効果的教育を始める上で直面する多くの疑問に答える狙いで書かれたものである。

この改訂版の基本的内容構成は旧版と同じであるが、それぞれの教授法の理論や研究成果をこれまでより多く取り上げている。

本書は眼の前に多くの問題を抱えている新任教師を念頭に置いているので、各章では、まず「コツ」を提示し、続いてより詳しく説明する形をとっている。

この改訂版には、「個別教育システム」「教師の役割」「学生による教授」「教育ゲームとシミュレーション」に関する章を新しく加えた。それから最近の認知心理学の発展を十分考慮に入れ、「動機づけ、学習、認知」の章はすべて書き改めた。また学生による教師評価については、これまでより相当多くのページを割いている。

本書がこれまでアメリカ以外の国に於ても広く読まれ利用されてきたことを嬉しく思う。私と同様に大学教育の改善に関心を抱いている諸外国の人々との交流が深まるにつれて、本書で私が

のべている事柄の多くにアメリカ文化が強く反映していることを教えられた。しかしそれでも本書は学生の教育に関心を持っている人々にとって価値あるものだと私は信じて疑わない。

本書の初版はグレゴリー・キンブル氏（Gregory Kimble）の協力で完成したものである。彼の機知と博識はこの改訂版でも多くの個所に滲み出ているはずである。

ウィルバート・J・マッキーチ

大学教授法の実際　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

訳者序……3
改訂版への序文……7
序章……21
1　大学文化
2　研究か、教育か
3　教授法に関する研究
2章　授業に向けての準備……28
1　授業初日三ヵ月前
授業科目目標の設定　授業要目の草案作成　教科書、教材の注文
2　授業開始二ヵ月前
課題の試案　コース概略あるいは授業要目の内容の決定　適切な教授方法の選択　学期当初に必要な教材の点検　講義準備の開始―もし講義形態を採る予定であれば
3　最初の授業二週間前
教科書と図書館資料の点検　受講学生数のチェック　教室の点検
第一回目の授業の準備

3章　最初の授業……42
1　口火をきる
2　問題の掲示
3　授業科目の概略
4　教師の自己紹介
5　教科書の紹介
6　質　問
4章　講義法……53
1　講義の組み立て
2　理論ノート
3　講義法対教育機器
5章　効果的討論……64
1　開発討論
2　討論を進めていく技能
討論のスタート　討論に参加しない学生をどうしたらよいか　発言独占者　問題の分割　我慢　前進の評価　討論の障害　意見の衝突

討論によって学ぶもの
3 教師の役割
6章 教師の六つの役割……88
1 専門家としての教師
2 公的な権威としての教師
3 社会化請負人としての教師
4 学習の促進者としての教師
5 自我の理想としての教師
6 人間としての教師
7章 実験法……106
8章 自由研究……108
9章 学生による教授……111
1 学生を教師として活用する
10章 文献利用学習、プログラム学習、CAI……115

1　文献利用学習と教科書
2　プログラム学習
3　コンピュータの活用

11章　PSI、TIPS、契約プラン、モジュール授業……126

1　ケラー・プランまたは個別指導システム
　ケラー・プランの基本的性格　ケラー・プランのまとめ
2　TIPS（教育情報処理システム）
3　契約プラン
4　モジュール教授法

12章　視聴覚技法……135

1　テレビジョン
　テレビジョンの活用
2　映　画
3　LL施設とカセット・レコーダー
4　写真、OHPおよびその他の視覚教具

5 聴覚・個別指導法
6 メディア利用学習グループ
7 まとめ
13章 ロール・プレイとマイクロ・ティーチング……150
1 ロール・プレイ
2 マイクロ・ティーチング
14章 ターム・ペーパー、リポート、専門家の招聘、見学、実習……158
1 ターム・ペーパー（学期小論文）
2 リポート
3 個別指導
4 専門家の招聘
5 見学、実習
15章 ゲーム、シミュレーション、事例法……165

1 ゲームとシミュレーション
ロシア史調査コースにおけるシミュレーション
2 事例法
16章 試験 …… 172
1 学生の攻撃を弱める
2 テストの時期
3 テストの作成
設問のタイプの選択 短かな答を求めるテスト 小論文テスト 真偽法テスト 多項式選択テスト どれほど多くの問題を出題すべきか?
4 テストの実施
5 カンニング
カンニングの防止 カンニングの処置
6 テストの採点
論文答案の評価
7 テスト結果を評定する

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com